

浄土

monthly
JŌDO

July•August 2000

7.8
月
合併号



法然上人鑽仰会

21世紀もしやべったる。

OK!

市外も、国際も、
インターネットも、
携帯も、
日本テレコム。



●お問い合わせはお客センターへどうぞ ☎ **0088-82** (無料) (受付時間) 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ <http://www.japan-telecom.co.jp/>

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

八王子

極楽寺



極楽寺本堂と第四十世小澤憲珠住職





本尊の阿弥陀如来立像は別名、齒吹尊。口元が微笑んでいて、歯が見えることからこう呼ばれる。鼻取如来の別名もある



見事な内陣の荘厳



極楽寺が開山されたのは
滝山城周辺。正面の山が
滝山城跡

JR八王子駅。近年、
八王子は大学の
街になりつつある



極楽寺は滝山から八王子城（現元八王子）に移転した

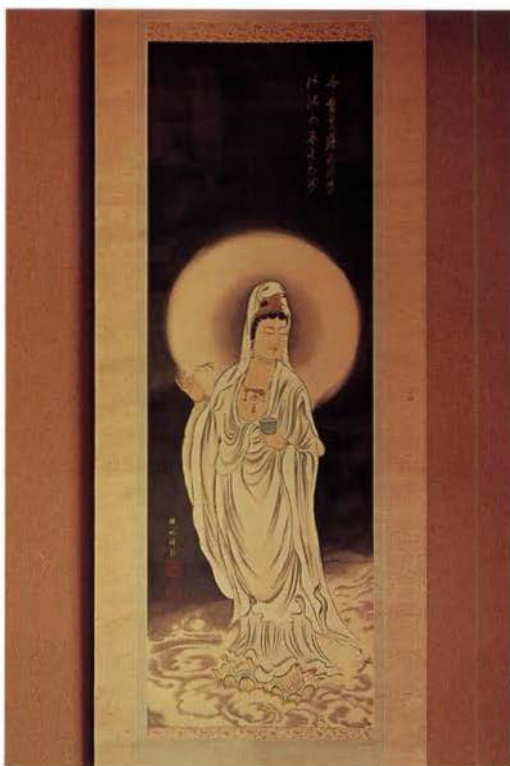
緑あふれる境内





小澤住職は現在大正大学の助教授でもある

極楽寺歴代住職の墓



寺宝のひとつ、山崎井栄上人が極楽寺で描いた観音像

浄土

2000/7・8月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 八王子・極楽寺.....	写真＝タカオカ邦彦	1
家族する家族.....	中野収	6
寺院紀行 八王子 極楽寺.....	真山剛	14
牡丹の寺 玄向寺.....		23
連載 法然上人をめぐる人々.....	石丸晶子	24
響流十方.....	袖山榮輝	30
列伝 笹本戒浄.....	八木季生	34
コラム 浄土宗と浄土真宗.....		46
Jフォーラム.....		47
浄土誌上句会.....	選者＝増田河郎子	48
マンガで楽しい仏教用語.....	藤井ひろし	51
編集後記.....		52

表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影＝芝崎慶三
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎



家族する 家族

「家族の崩壊」に抗して

中野収

一

一連の「十七歳の犯罪」は、現代文明の暗部を實に的確に表現している。とぼくは考えている。したがって、新聞・テレビ・雑誌の解説が判を捺したようにいう不可解だとは思っていない。たとえば、この少年たちの極端な「短絡思考」が指摘されているが、○×で即答、「事件」が起こるや直ちに開始される「犯人」捜し、頻繁に繰り返され報道される各種世論調査——これらは多かれ少なかれ、短絡思考の産物である。ひとり少年たちだけではないのではないか。

「暗部」と書いたけれど、これは現代文明が「心ならずも」生み出した、歓迎すべからざる副産物ではない。結局のところ、ぼくら全員が認めているこの文明社会の、その必然的な「生理」の産物である。だから「十七歳の犯罪」は起こるべくして起こっているといえる。早い話、ある少年は「人を殺してみたくなった」といった。「なんでもみてやろう」「なんでもしてやろう」は、戦後社会、教育で大いに推奨されてきた。そしてこのなんでもに殺人が含まれていないとは誰もいっていない。むしろ、「やりたいこと」はすべていいこととされてきたのだから。

問題は、短絡思考にも、不可解にも、「精神科医であるわれわれにもわからない」（これってある意味での医療ミスじゃないのか）にもない。そうではなくて、ある世代から下にみられる行動における抑制力の著しい欠除にある。とぼくは見ている。ぼくらが共同生活

（社会）を続けねばならないとしたら、行動における抑制力は不可欠である。「何をしてもいい」のでは、そもそも人と人とのかわり（社会）など不可能なのだから。

バスジャックの少年の場合、警察の常套手段である「肉親による説得」が試みられようとした。報道によると、説得を求められた母親は「わたしたちの言うことなど聞き入れない」といつて、要請を拒否したとか。確認のしようなどないのだが、ぼくには実感がある。「説得」というコミュニケーションが、今多くの家族で不能であるし、そもそもこういうコミュニケーションが成立するように、もう家族は作られていない。少なくともこれが不可能なほどに変質してしまった家族が、無視しえない割合で存在する。この「変質」は「崩壊」といいかえることもできる。

この「崩壊」と、人をして「不可解」「動機不明」「当事者に犯罪、罪の現実感がない」といわせている「十七歳の犯罪」とが、同根であること。つまり「ことがら」のすべてが、先進国における広義の「近代化」という文脈の上で起こっていることが問題なのだ。「近代化」をしながらの「家族の再編」というのは、論理的には明らかに自己矛盾である。「託児施設が整えば女性が子供を産むようになる」という命題を、ぼくは信じない。

一一

結婚しない人々、結婚しても子供を産まない夫婦、子育てから逃避する親たち、幼児虐待、強制された孤食、不倫に離婚、老人の孤独等々——これらには「今、話題の・・・」

という形容詞がつけられている。テレビのワイドショー・ニュースショー、新聞の社会・生活欄、雑誌の特集等で、週に一度や二度はお目にかかれる。もはや例外ではなく、ごく一般的な社会現象なのだ。

「結婚なんて考えていない」「結婚するとしても三十すぎでしょう」「結婚しても生活を楽しまないから子どもを産まない(邪魔だ)」「いつ離婚するかわからないってこともある」「子どもは好きじゃない」「子育てなんて考えただけでぞっとする」等々、学生たちがごく通常のおしゃべりの中でこんなことをいだってもう二十年余になる。ぼくの実感だと、この「話題化」と子どもの数の減少は、ほぼ正確に相関している。女性の社会進出、福祉施設の「劣悪化」のせいではない。これをいい始めた彼、彼女たちは、もう四十代である。シングル、子なし、不倫、離婚、子ども問題の多発等々の世代である。二十年前、彼らはホンキだったのだ。冒頭に列挙した事実は、すべて「反家族」である。もちろんかつての彼らのことばの主旨も「反家族」だった。

70年以降、人間の絆とか、人と人とかかわりとか、人に対するやさしさとか、が話題になった。マスコミは、この種のことから関する「美談」を報じ続けた。しかし、話題と実態は相当に乖離していたようである。つまり、70年を境にして、男女観、夫婦観、親子観、兄弟観、家族観、地域観、職場での人間関係観、総じて人間(関係)観が、ちょっとオーバーというと、逆転してしまったのではないか。いうまでもないが、「観」だけの変質に止まらなかった。実態も着実に変わった。逆転に近い変化が始まったのだ。

どうなっているのか、つまり実態については、すでに書いたとおりだし、これは読者もすでに御存じのことで、「家族の崩壊」は今や、マスコミの話題だけの問題ではなく、まさに現実である。今の事態を称して「崩壊」など事実と反する、という説も確かにある。しかし、たとえば子育てから逃避した親たちを「収容」する社会的施設、これ自体が見事にかつ的確に「崩壊」を象徴している。「崩壊」は事実であり、現実である。実際に逃避してしまった実数は少ないかもしれない。しかし、「逃げ出したい」と思っている親たちが、現実の逃避者の背後に多数いるはずで、それらは「半崩壊」した家族である。「崩壊」は社会的規模で進行しているといわざるをえないのではないだろうか。

家族Ⅱ家父長制家族という固定観念が一方にあり、他方に今のような家族形態（家父長制と核家族を含む）が成立したのは江戸末期以降といった見解や、江戸まではすべて核家族だったという考え方もあり、「家族の崩壊？、悪いか？」とか、「家族の崩壊！、結構じゃないか、大歓迎！」と主張するムキもある。家族・家父長・核家族といった制度は、明らかに歴史的である。しかし、血縁者がなんらかの共同生活をし集団を営むのは、超歴史的な事実である。共同生活・集団は、人という種の生存の前提条件なのだ。考えねばならないことは、「家族」の有無や是非の問題ではなく、人間が昔から営んできた共同・集団生活の役割・機能を、現代の状況で、どういう社会システムが負うか、ということだ。

家族という集合体が普遍になったのは、この二百年、だから家族など絶対的なものではない、なくなっても当然、守らなければならないものではないというのが、反家族論者の言

い分である。しかし、「今、ここで生きている」われわれには、家族の中に生まれ育ち、家族を作り、そこで生活する、楽しみも苦しみもそこで経験するしかない。二百年前や二百年先のことなど関係ない。その家族は絶対的なものじゃないんだ。といくらいわれても、実はなんの意味もないし、今「家族なんかやめちゃえ」というのは、集団をなして「生」を営むな、というに等しい。人間は集団性なしに生きられることを、まだ誰も証明していないではないか。

三

家族の崩壊は進行中である。しかし、すべての家族が崩壊してしまったわけではない。ちゃんと健全に営まれている家族もたくさんあるし、壊れてはいないけれど危険をはらんでいる家族もある。いうまでもないが、家族の崩壊を願っているムキはごく少なく、家族とともにいることに生き甲斐を求めている人は多い。そう、家族願望のほう在实际はより強いのだ。この、文明国に共通の崩壊の圧倒的な流れの中で、健全な家族が維持され、崩しては作り直そうという努力が試みられているのは、その願望の強さの現れだろう。

実際は、崩壊させる「力」と作ろうという願望がせめぎあっている。大きな傾向としては、読者も見るとおり、崩壊のほうが歴史的社会的傾向としては強い、数の上では保持されている家族のほうが多いのだけだ。

「力」が強いということは、家族を形成し持続させ、かつ家族が一定の社会的役割を果

すこと、これを妨げる作用のほうが支配的だということである。「共同生活はわずらわしい」「二人で海外旅行したいから子どもは産まない」「子育てなんてコリゴリ」「……」等々は、すべて家族の形成、維持、家族の文化的機能を否定している。しかも、かつてのような、家族拒否に対する社会的批判もほとんどない。したがって、地域、近隣社会の中で生まれ育ち、自然にやっていたら自分自身家族を作り持っていた、というふうにはもうなっていない。

「近代」で「個人」だから当然といえば当然なのだが、家族を作り維持し機能させることは、極めて主体的・意識的・選択的な行為であり、家父長制的集団が個人個人をかばい助けてくれたようなことなどもない。どう作ってゆくか、どんな結果が生まれるか、のすべてに関して当の本人が責任を負わねばならない。家族を作り維持し、そこで「生」を実現してゆくことを願うならば、みずから選び、みずから実行し、みずから責任を負う、という自覚的意識、それに行為を持続させねばならない。外側から与えられた約束、規範にしたがっていけば、自然に家族が出来上がり、自然に父（母）親になっていた、という「幸せ」な時代ではもうない。

常に意識し、行為を自覚的に続ける、家族を作り、父（母）親になるために——これは、実は、決して強くは作られていない人間にとって、ごく平凡な普通な人にとっては大変に困難なことなのだ。崩壊させる「力」のほうが強くて当然。逆に家族を作るとしたら、困難を覚悟で、歴史と社会の大きな流れに抗していかねばならない。そういう家族のありか

たを、ぼくはかつて「家族する家族」と呼んだ。もう数年も前である。現実には家族をもつとするならば、ますますもって「家族する」ことが要請されている。どうすれば家族は保たれるのか、父（母）親になるとはどういうことか、家族としてなにをなすべきか——こうした課題を常時みずからに問ひかけ、課題にしてゆく、それが「家族する」ことなのだ。

「そうまでして……」と思われるかもしれないが、これはわれわれが選んだ「近代社会」「主体性」「個人主義」「自我の確立」の論理的帰結なのである。「近代の宿命」とでもいえるまいか。そういう宿命を負っていると自覚すること、これなしに家族などありえない、ということなのだ。

（中野 収）

1933年松本生まれ。法政大学社会学部教授。

東京大学卒。専攻、社会学、コミュニケーション論、メディア論。

著書『家族する家族』『都市の「私物語」』『若者文化人類学』

『コミュニケーションの記号論』『メディア人間』等。

寺院紀行

八王子

極楽寺

撮影・タカオカ邦彦

文／真山 剛

国道十六号線に面している極楽寺の山門



開創五百年。

平成十五年、八王子の古刹、宝樹山極楽寺がこの記念すべき年を迎える。

創建は永正元（一五〇四）年、かつての滝山城のあたり、現在の滝山街道付近に極楽寺は建立された。開山は鎮誓愚耕上人。

現在、五百周年という月日に向けてこの名刹を守っているのは第四十世、小澤憲珠住職だ。住職は昭和十六年この極楽寺の長男として生まれ、大正大学、同大学院で仏教学を学び、現在も助教授として教壇に立っている。住職の父であり先代である小澤勇貫上人は平成五年に遷化されたが、やはり大正大学で浄土学を教えていた。

余談だが、勇貫上人が本誌『浄土』にかつて連載した「法然上人『小消息』と『善導大師の『発願文』』、そして「十夜の随筆」を先代の七回忌法要に合わせ小澤住職が出版された。『「法語に学ぶ」と題されたこの本が法然上人鑽仰会編集なので、編集部で拝見させていただいたが、わかりやすい文章には学者としての見識とその人柄が忍ばれる。昭和四十八年の随筆「お十夜の季節を迎えて」も併載されているが、極楽寺と大善寺の十夜の模様や往時の様子が描かれていて、取材にも役立たせていただいた。

さて、住職に五百年という節目を迎えるにあたっての思いを伺ってみた。



大晦日、地元の方についてもろう鐘楼

「一過性のお祭り騒ぎでは困りますし、後世にきちんとした形で残る事をしたいですね。具体的には本堂の改修、内陣の塗り替えになるかと考えています」

インタビュ어의最後に同席頂いた治子（富子）夫人はこう付け加えられた。

「五百年という節目を迎えさせていただけるのは幸せではあります、皆さんのおかげで支えられて来ましたこのお寺を、次の世代にしっかりと伝えなくては、と責任を感じております」

こうした五百年目に向けての思いとともに、お二人に共通する思いがある。それは寺に住む者、つまり住職とその家族である寺族の信仰の在り方である。

念仏の信仰を伝えるという役目を、どう果たしていくか。自身の念仏信仰を、どう深めていくか。これが住職夫妻の日々の目標なのである。

三十年近く続く月一回の「同信のつどい」にはそんなお二人の気持ちが届いてか、檀家以外の方も含め多くの念仏信者が集まっている。振り返ってみれば、五百年という月日もこうした日々の積み重ねがあつてこそ、なのである。

さて、極楽寺の伽藍に目を移そう。国道十六号線、地元の人はい日光街道と呼んだそうだが、これに面した現在の境内はおよそ四千坪。





八王子市開祖、長田作左衛門の墓(上)と
『桑都日記』を著した塩野過齊の墓

山門からの参道脇には八王子市開祖の長田左衛門の墓、墓地内には各種風土記の編纂や『桑都日記』を著した塩野適斎の墓、玉田禪尼と呼ばれた小督の墓が並ぶ。いずれも東京都の旧跡で、極楽寺が八王子の歴史と共に歩んできた証でもある。

参道右手には鐘楼、左手に弁天堂、その奥に客殿と庫裡。正面の本堂は十一間四方の堂々たる伽藍で、享保十三（一七二八）年の重建だ。昭和四十年代にトタンから銅板の屋根に替えたが、三百年近くになるだけに柱も少し歪み始めている。住職が五百周年の記念事業のひとつに本堂改修をあげるのは、こうした事情もあるようだ。

その本堂に奉られている本尊は市の指定有形文化財で、鎌倉末から室町にかけての寄せ木造りの阿弥陀如来立像。園吹尊とも鼻取り如来とも呼ばれる本尊で、園吹と呼ばれる理由は、かすかに口もとに笑みを浮かべ、園をわずかにのぞかせているからである。また鼻取と呼ばれる由緒は、この如来が小僧に身を変じ、馬の鼻先をとって田んぼを耕したという伝説によるものだ。

この他、什物としては徳川家康公軍扇の面、現在は市の資料館に保存されているが先の『桑都日記』五十巻などがある。

また、かつては参道の両側が杉並木で、天災でその跡はないものの、樹木、草花が溢れる境内からはその名残りが感じられる。

境内のすぐ脇を流れるのが、かの西行法師も歌に詠んだ浅川。か

浅川。写真右手の林が極楽寺



つては織物を染める職人さんがずらりと並んだり、現在の高尾駅が以前は浅川駅と呼ばれていたように、甲州街道と平行するこの川は八王子のシンボルでもあった。

織物といえば極楽寺什物の『桑都日記』という題名が付けられるように昔から八王子は織物の町であった。江戸に徳川幕府が開かれ、やがて世界でもまれな百万都市に成長する中で、八王子は江戸への物資の拠点となって栄えてきた。特に木炭や石灰、織物が八王子の特産で、中でも織物は西陣や桐生と並ぶ名産地であった。

この織物は江戸から明治になってからも多いにもてはやされ、日本が開国し横浜が外国との窓口となるや、八王子から横浜までを八王子の鍔水商人などが行き来し、絹の道と呼ばれた。この絹の道については八王子市の南、町田市に隣接する鍔水の「絹の道資料館」にその足跡が残されている。

大正時代には「ガチャ万」という言葉が流行った。ガチャと一回織機が動けば、万の金が儲かるという意味で、要は戦争特需なのだが、織物の町八王子の好景気ぶりは相当なものだったようである。

いまでも甲州街道沿いには織物関係の店が並ぶが、中でも有名なのが荒井呉服店で、歌手の荒井由美（結婚して松任谷由美）の実家でもある。日常生活で着物を着る人が減ったとはいえ、八王子は今も変わらず桑都、織物の街なのである。



八王子城本丸跡に立つ祠と記念碑。
碑の裏には極楽寺先代住職勇齋上人
の名も彫られている

現在の極楽寺は浅川脇にあるが、ここは二度目の移転先である。

開山の地、滝山からまず八王子城、現在の元八王子に移転したのだが、当時の滝山城主、北条氏照と極楽寺の第三世文誉智徹に親交があり、智徹の進言で八王子城に移転したと言われている。移転時期は天正年間（一五七三～一五九二）の初めの頃だったようだ。

八王子城が築かれた地は、武州から甲州への入り口にあたる場所
で交通の要衝であった。しかし時まさに戦国末期の風雲時代、八王子城は完成する前の天正十八（一五九〇）年、豊臣秀吉の軍勢に攻められ落城してしまう。落城時に城主氏照は小田原城にいたが、その武将としての手腕を恐れられてか、当主でもないのに切腹となった。その氏照の墓は八王子城へ向かう手前にある。

落城後は江戸幕府の直轄地となり、また人の手があまり入らなかつたこともあり、現在、八王子市が力を入れ城主の居館、御主殿跡の整備などに取り組んでいる。山城の本丸までとなると、約三十分の山登りだが、御主殿跡は麓の城山川沿いにあり、道も整備されているので気軽に散策できる。

さて、本丸跡には現在小さな祠と八王子城本丸址の碑が建っているが、碑の裏に八王子市文化財専門委員の名が十一人連なっている。そこに極楽寺先代住職の小澤勇貫の名を見つけ大いに驚いたのだが、寺院と地元の関係の深さを改めて気付かされた。

八王子城本丸下の八王子権現。この神社が八王子の地名の由来となっている



そして、本丸跡の少し下に八王子権現がある。八王子の地名の由来となるのがこの八王子権現で、滝山からの移転時にはすでにこの地にあった。八王子権現の由来は、牛頭天王のお告げを聞いた僧が、この地に牛頭天王と八人の王子王女（五男、三女神）を鎮守として社を建てたことによる。そこで氏照は当時深沢山と呼ばれていたこの地に城を築くにあたり、この八王子権現を山上に奉り城の守護とし、城の名前も八王子城としたのである。これによって八王子の名が関東一円に広まったのである。

さて、八王子城の落城により、現在の八王子の街作りが始まるのだが、極楽寺には現在の寺領が与えられた。その向かいに移転したのが大善寺である。ちなみに大善寺は北条氏照の開基で、開山は讃誉牛秀上人。関東十八檀林の一つとして、二十四か寺という多くの末寺を持ち、またお十夜で名を馳せた大善寺は滝山から元八王子、そして現在の極楽寺の向かいへと一緒に移転し続けたが、昭和三十八年には現在の大和田町に移転、単立となっている。

八王子の町作りはこうして始まったが、その指揮は石見、現在の鳥取県の出身である久保長安の手に委ねられた。長安は新たに甲州街道を切り開き、新八王子の中心街路とした。そしてその両側に横山宿、八日市宿、八幡宿の三宿を置くことから始まり、同時に浅川の氾濫を防ぐ堤も築営した。これを基盤として八王子はまたたく間

関東十八檀林のひとつ大善寺



に開けたのだが、この時市場を開き商いを盛んにしたのが、極楽寺に眠る長田作左衛門である。

そしてもう一つ、八王子の歴史を語るときに忘れていけないものがある。千人同心がそれである。

千人同心とはいわば農兵で、普段は農業従事、いざという時には武士となる集団である。この千人同心に関する書物や研究書はたくさんある。千人同心は最初の頃は軍事的な役割を果たした。奥州への出兵、関ヶ原での家康の警護、朝鮮の役参陣などである。そして天下泰平の世となると、日光への勤番がその主な仕事となり、二百年続いた。江戸時代の末期には蝦夷の開拓、最後は官軍につき、二百六十年におよぶ幕府直属の半農の武士団は解体したのである。

ちなみに『桑都日記』を著した極楽寺に眠る塩野適斎も、この千人同心の一人であった。

こうした八王子の歴史とともに歩んできた極楽寺。車が行き交う道路から山門をくぐると一変して静かな境内。取材当日、朝から境内を掃除したり雑草を抜いている夫妻がいた。近くに住む檀家さんだそう。帰りがけに「大変ですね」と声をかけると、「えらいことですけど、ほとけさまのためだから」と答えてくれた。

極楽寺の歴史を支えてきたのは、こうした人たちなのか。そう思いながら名利を後にした。

（ルポライター）



牡丹の寺

松本駅より車で十五分、松本盆地を見渡す東山の麓にある、玄向寺（荻須真教住職）で五月十三日・十四日の両日、「第一回玄向寺ぼたん祭・雅楽演奏会」が開催されました。

同寺では、先住の故荻須真雄上人の手により、牡丹が植えられ、現在では一千二百株に増え、花咲く頃には多くの人が訪れ、見事な大輪にしばし足を止め、時にはカメラに収め、「牡丹の寺」として慕われています。

今年からこの時期、牡丹が咲く中で伝統の音楽を楽しんでもらおうという趣向で真尚副住職が所属の京都市の大学生らが雅楽を学ぶ「いちひめ雅楽会」の演奏が行われました。当日は牡丹や藤が咲き、蜂や蝶が舞う庭園で真尚副住職が「先代は牡丹を植えて極楽浄土を表そうとした。私は音楽でそれを追及したい」との言葉通り、牡丹と雅楽の調べに多くの皆さんが集まり、優雅な一時を過ごしました。

同寺では来年も予定しています。

撮影・文／本誌特派員 宮寄善文



玄向寺

女鳥羽山
道樹院

「書きおろし連載小説」

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々

式子内親王の生涯（第二部）

第七回 残された人々

十九

檳榔毛^{びろうげ}の車のなかで重衡と親子^{ちかこ}がたがい抱きあつていた丁度そのとき、親子の父親範が隠棲する洛北大原の庵^{いん}では、文机にむかつて親範が娘の手紙を読んでいた。

つい今しがた、法然上人が重衡に面会するゆるしを法皇からいただいてほしいという親子の手紙をもって、嫡子の基親が洛内の邸から騎馬でかけつけてきたのだ。

春とはいえ、樹木のかげにひっそりと建つ庵室は、じっとしていると体じゅうに底冷えがしてくる寒さである。

かけひの水音にまじって、ときおり繁みのなかから山鳥の鳴き声がきこえてくる他は物音一つしかない。

「親子にも困ったものよ。何年御所に出仕しているというのか。女性^{にょしやう}には政事^{せいじ}というものがまるで分かつたらん」

手紙を巻きもどすと、親範はかたわらに控える息子をみつめて嘆息した。

「三位殿の懺悔を法然房が聴くゆるしを院に願うてくれというが、今の平家は昔の平家とはちがう。院のお怒りはげしい朝敵になつておられる」

親範は文机にむかつていたからだを息子のほうにむけ直すと、

「その朝敵になつてしまわれた方々^{かたがた}のことで、われら一介の公卿が何ごとか願いでるなど、今の情勢でできるものではないわ」

「親子の手紙をみて、われらも驚きました。鎌倉への聞こえもあり、かえつて院のお怒りに油をそぐことにもなりかねませぬ」

基親が答えた。

「いかにものう」

「つい数日前、一の谷に敗れた平家の首渡しがございましたが、その無残さはことばに尽くせなかつた由にございます」

「荒くれ者よ、板東武者は。首渡しなど、都

の者には思いもよらぬ」

「今の時局、三位殿のお取りなしをするには、われらはいかにも無力でございます」

「何としたものか」

思案の面持ちで親範は顎に手をおいた。

父子の上に沈黙が落ち、かけひの水の音だけがひびいていく。

とやがて基親が、

「親子にはこの旨申してやりましょう。いたしかたありません」

「待て」息子のことを親範はするどく制すると、

「八条女院様にお縋りしようぞ。女院様ならば院へのお取りなしもしてくだされよう」

きっぱりと親範はいった。基親はハッとしたようすで父をみつめると、

「おお、八条女院様がおられましたな。さすがは父上、父上でございます」

二十

同じ日の夜、院御所の奥まった一室では、

あかあかと灯された燭台の灯かげで、後白河法皇と八条院暲子とが話しあっていた。

戦火をさけて太秦の山荘に疎開している女院のもとに、夕刻、親範と基親がかけつけ、重衡が法然上人に懺悔するゆるしを法皇からいただいてほしいと、女院にねがいでたのである。

彼女は後白河の異母妹で年齢は四十八歳。きさくで大どかな人柄で面倒見がよく、公家社会のだれかれから頼りにされて、親範父子のねがいをきくや、すぐさま牛車に乗って院御所にむかったのだった。

「女院のお気持ちはよくわかりますが」と後白河はしきりにうなずきながら、

「しかし、重衡の罪ということも忘れてはなりませんまい。聖武天皇の」

後白河はもつともらしく、念珠をもった手を胸の上まであげて両手をあわせ、

「御建立あそばした大仏殿を焼き払ったので

すからな。仏敵はいうに及ばず、われらにとつても、にくむべき朝敵といわねばなりませんまい」

ことばにするだに身の毛がよだちますぞ、と後白河はかさねた。

「院のお怒りはわたくしにもよくわかるのですよ。わたくしとて、重衡の罪を思うとおそろしさと悔しさがこみあげてきて」女院は袖から懷紙をとりだすと目にあて、

「けれども、重衡は重衡としてあわれでね。聖武天皇様以来のことをおもうと悔しさで一杯になるけれど、では、重衡をこのままにして鎌倉へ渡してしまつてよいかといえば、それもまたあわれすぎるのですよ」

女院はすすり泣いた。

「お歎きなさるな、女院」

後白河は困惑のいろをうかべて、

「法然房に対面させるといっても、かようなことはみ仏がゆるされませんまい」

「出仕している女房たちの話によりますと、

十悪五逆の悪人をもみ仏は来迎されると、法然房は教えているそうですよ。わたくしも一度、法然房を邸に招いてみたいと思つてね」女院はすすり泣いたままかきくどいた。

「しかし——」

法皇がいいよどみ、返事をしかねているのを見た女院はつづけて、

「こんどのことでは齋院も心を痛めて、実はここ三日程、起き上がれないでおられるのです。乱世を目のあたりにされて、ひどく衝撃をおうけになったようなのですよ」

「われらより母親に似たのか、齋院はあのとおり繊細でありますからな」

齋院が三日程起き上がれないでいる、というのをきいた後白河の心に、このとき、何か疼きにも似たものがよぎった。

公家社会で「齋院」とよびならわされている第三皇女式子は、すでに母を亡くし、同居していた弟以仁もちひとを騒乱のなかで失い、内親王といつても後見人を誰にもつかで勢力の消長

がきまってしまうようなこの時代、これといった後見人のいない身の上であった。

そんな三女の周辺を心配した法皇は、いよいよ源平合戦が本格化しはじめてから、この三女を隠然たる力をもつ異母妹八条女院に預けていたのだ。

式子は今、女院の山莊常盤殿とぎわだのに女院と同居している。

二十一

「雅仁さんまさひと」

女院は後白河をその名前でよんで、

「雅仁さんからわたくしは以仁を猶子にいただいて、以仁が平家の流れ矢にあたつて討死したときには、ことばにいいない悲しみを味わいましたよ。弟を失つた斎院とて同じ思いだったでしょう。でもね」

女院の太どかで美しい顔に、悲しみのかげがよぎった。

「この日ごろ斎院と話しているのですよ。仏罰といえは、平家は十分すぎる罰をうけたつて。源氏の侍たちが平家の首渡しをしたつきいたときは、斎院もわたくしも泣いたので。去年の夏まではこの殿上てんじやうにいた人たちはありませんか」

女院は顔を桂の袖つぎでかくして泣いた。

「——いや、われらとて、女院と同じ心ですよ。平家は十分すぎる罰をうけたかもしれませんが。ただ——」

一瞬口ごもつた後白河は声をおとすと、

「女院や斎院は女性ゆえに、平家をあわれと思召して、それでよろしいかもしれません。しかし、われらには政事まつりごとをする立場というものがありません」

「……」

「われらが今ここで重衡に情けをかけてやつてごらんなさい。鎌倉や九郎たちが怒って何をしだすかわかりませぬ」

「雅仁さんは政事のあるじではありません」

か。法然房を重衡のもとに送るのに、何で源氏のゆるしが必要でしょうか」

「女院」

思わず、後白河の口調は強くなっていた。

「今、女院も首渡しのことを仰せになったではありませんか。東国の武者どもは何をしだすかわからぬ下郎にございますぞ」

「――」

「乱世も乱世、世の中は変わり申した。今は法皇といえども、頼朝や九郎のことを念頭におかずしては、政事ができぬ世になっております」

後白河がそういう終わったとき、突然、何かひらめきがおこったのか、八条院はハッとしたように顔をあげ、

「雅仁さん」

と呼びかけると、

「院のお立場はよくわかりましたよ。しかしね」

声がいささかはずんでいた。

「いかに洛内外の評判が高かろうと、法然房は無位無官の町の僧ではありませんか。叡山の地位身分ある僧侶を重衡に対面させるというのとはわけが違います。町中に住む民衆教化の聖が対面するのには、何のはばかりがありましょう」

女院は一気にいうと、つづけて、

「雅仁さんは黙認していればいいのです。それに今、重衡に情けをかけてやるのも、雅仁さんの後世の功德にもなりましょうぞ」

石丸晶子（いしまるあきこ）

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究所修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝―面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』（人文書院）『お手紙から見る法然さま』（浄土宗出版室）『現代語訳蜻蛉日記』（朝日新聞社）など多数。

その人命終の時に臨んで、阿弥陀仏、諸の聖衆とともに、現にその前に在す。この人終わる時、心顛倒せず、すなわち阿弥陀仏の極樂国土に往生することを得。舍利弗、我この利を見るが故にこの言を説く。もし衆生あつて、この説を聞かん者は、まさに発願して、かの国土に生ずべし。

『仏説阿弥陀經』

ひとすじにお念仏を称えた人の臨終には、阿弥陀さまが極樂の聖者とともに、本当にその人の目前にまでお迎えに現れる。(そのお姿を拝せば)死の瞬間に至つても心は乱れず迷わず、阿弥陀さまに導かれ即座に西方極樂浄土へと往生が叶う。舍利弗よ。私、釈迦は阿弥陀さまの、こうした救いを知ればこそ、このように説くのだ。「もし、この念仏往生の教えを聴く者がいたならば、阿弥陀仏に願ひ奉り、必ずや極樂往生を叶えなさい」と。

いのちの行き先

死後の世界、あの世があるのか、ないのか——。

こうした議論が交わされる時、「仏教では無記といひまして、お釈迦さまは、いわば死後の問題にはお答えになりませんでした」として、「毒矢の喩え」が持ち出される場面がある。

たとえば毒矢に射られた人がいたとして、すぐに矢を抜き取らなければ、全身に毒がまわり死に至る。少しの躊躇も許されないが、もしその人が、「矢を放つたのはどんな奴か、その弓の性能、矢の材質、鏃の種類は何か、それが分からぬうちは矢を抜くな」と語ったとしたらどうなるか。その人は答えを知る暇もなく死に至る。

そのように、あの世の有無を問うことなど、毒矢に討たれた人が、その矢を抜く前にあれこれ理屈を並べているようなもの。だからお釈迦さまは、あの世の有無など問題にしなかったし、お答えにもならなかった。死後のことより「今をいかに生きるか」、現実を見つめ、今、覺りを求めていくのが仏教である云々、と。

今生に、そして、この世で覺ろうというのであれば、あの世につ

いての議論は確かに不要である。「覚り」そのものを論じたがる現代的で知性的な思考とも一致しよう。しかし、そうした解釈が施されれば施されるほど、我がいのちの行き先として西方極楽浄土を想い、み仏の、ご先祖の、そして亡き家族のもとへと往生を願う凡夫の心情が、なにか軽んじられているような気がしてならないのだ。

「毒矢の喩え」はいわゆる阿含經典に見られる。漢訳では『箭喩經』、南伝では『摩羅迦小經』。いずれもマールクンヤブッタなる若い修行者がお釈迦さまに「難辯」をつけるところから始まる經典だ。いわく、「魂と肉体は別々なのか、衆生に死後の世界、あの世はあるのか。こうした疑問に、お釈迦さまは今まで明確にお答えになってはいません。そのお答えをいただかなければ、私は修行などやめてしまつて俗世に還ります」と。

みずからの煩惱に身を焦がし、現にもがき苦しんでいる己であればこそ一刻も早く出家修行し、欲望の対象から我が身を遠ざけねばならない。それなのにこの若者は修行を嫌い、自身の欲望・煩惱は

棚に上げ、さも訳知り顔で甘ったれたことをいう。それ故、お釈迦さまは「私が答えない限り修行をしないというのなら、その間にお前の寿命は尽きるだろう」とお答えになつて『毒矢の喩え』を示し、即刻の修行を促したのだ。「あの世を問う暇に修行に励め」。もちろん尊い教えだが、この若者がこの世で覚り目指す修行者であればこそ、お釈迦さまはあえて「無記」なる態度をとつたに過ぎない。

覚り、涅槃の世界の解釈はさまざまだ。凡夫には計り知れない世界だし、「無」の世界であるともいう。しかし、それだけに阿弥陀さまはご自身の覚りの境地を西方極楽浄土という具体的な姿・形に顕わし、しかも死後、我々凡夫のいのちの行き先として定めてくださった。今、極楽の世界をこの眼で見ることはない。が、死後の極楽往生を願えとは、他ならぬお釈迦さまがお勧めになったこと。心底、極楽往生を願い、日々お念仏を称えている凡夫にとって、浄土の存在をあえて「無記」とする必要はない。凡夫が今生に覚れるはずと思つても詮無いのだから。

（浄土宗総合研究所研究員 柚山榮輝）

連載

雑誌『浄土』を支えた人々

列伝

仏教ルネッサンス再び。珠玉の一冊『念佛読本』執筆者たちの足跡

笹本戒浄



八木季生

はじめに

笹本戒浄上人は、近代の聖者山崎弁栄上人の感化を受け、光明主義を実践宣布し、東京帝国大学で習得した元良（もとら）勇次郎博士の近代心理学の内容を駆使して明解緻密な布教を展開し、念仏教化の多大な影響を与えた偉大な念仏行者である。

生い立ち

笹本戒浄上人（1874—1937）は、明治七年一月十四日、河田米次郎、コウの三男として、東京浅草の黒船町、（現在の台東区駒形1—1—1）で誕生された。

父の河田氏は、富山県の出身で、戒浄上人（幼名金次郎）誕生の頃は、台東区の蔵前で山城屋という唐物屋（洋品雑貨店）を営み、使用人50人ほどを使う貿易商であった。

母のコウさんは、千葉県久留里藩の武士の末裔であった榎本善次氏の娘で、浅草の観音さまに日参していた時に、与えられた子供が

金次郎であると語っていたというくらい、熱心な観音さまの信仰者であった。ちなみに上人の生家から浅草寺までは、直線距離で600メートル程の距離である。

戒浄上人の生家の近くに浄土宗寺院のかや寺があるが、その住職の世話で、明治十四年、八歳の時に鎌倉大仏殿の樹下信戒師に懇請されて、養子になった。

明治二十五年、十九歳の時、大本山増上寺において、同寺第七十五世、野上運海大僧正について宗戒両脈を相承し、浄土宗教師の資格を取得された。更に明治三十二年、金沢の第四高等学校に入学された。

明治三十五年、二十九歳で第四高等学校を卒業した上人は、東京帝国大学哲学科に入学し、元良勇次郎博士について、心理学を専攻されることになった。

元良博士は、わが国では初めての科学的な心理学を指導し、同時に倫理学や論理学の講

義も担当し、戒浄上人に思想的な影響を与えた指導者である。

明治三十七年四月、東大在学中に慶運寺住職になり、笹本良侃（りょうかん）師に養子縁組を変えられて、笹本姓を名乗るようになった。

明治三十九年七月に東大を卒業されたが、卒論は「成唯識論の心理説」である。この論文は、成唯識論を基にして唯識の思想を心理学的に説こうと試みたものである。その年八月から宗教大学（現、大正大学）で、唯識学、一般心理学等を教授され、大正三年三月まで八年間在職された。

明治四十一年十一月、三十五歳で広島県高田郡吉田町の士族で、養父良侃師の実兄の孫娘である笹本ふじさんと結婚された。

二人の恩人

笹本戒浄上人のご一生に、大きな影響を与えた二人の恩人がある。一人は兄弟子である

宮本契善師であり、もう一人は恩師山崎弁栄上人である。

契善師は、東神奈川慶運寺笹本良侃師の弟子で、兄弟子になる。生麦の安養寺という寺の住職で非常によく念仏を称えた。戒浄上人の法話の中で、「兄弟子は、無学でありましたが佛眼まで開くお育てを頂いていました」と言われている。

契善師は、大正二年一月八日に遷化されたが、その指示によって、戒浄上人が弁栄上人にご縁を頂くのである。

このお二人の画期的な邂逅は、契善師の亡くなった大正二年、弁栄聖者五十五才、戒浄上人四十歳の時のことであった。

この初めての邂逅について「最初三拝いたしまして、略懺悔を称えて無始以来の罪を懺悔した後、聖者に申し上げました。『私は如来様の法身を理想としております』と。すると聖者は『いいえ、私どもの理想は、如来様

の報身であります。それ故、報身を本尊と仰がなくてはなりません」とお教え下さいました。この時以来、長年唱えておった禪宗流の念仏を捨て、聖者から頂戴した阿弥陀様の尊像を掲げて念仏することになりました」と述懐されている。

聖者に帰依せられた戒浄上人は、慶運寺に毎月一度聖者を招待され、ご自身がみ教えを受けられるとともに、多くの人を集めて聖者の法話をお聞きする機会をつくっている。また、地方で聖者の別時念仏会の行われる時は、万難を排してこれに出席をされた。

大正九年十二月四日、弁栄聖者は新潟県柏崎極楽寺において遷化されたが、その後聖者のご遺志を継いで、身命を賭して念仏の伝道に各地を歩かれた。

昭和十二年七月二十一日から五日間、洛北古知谷の阿弥陀寺で別時会の導師をされたが、これが最後の伝道になった。京都から慶運寺に二十六日の夕刻帰坊されたが、九時過ぎに就寝された直後に脳溢血を起こされて、異変を察知した家族の処置も間に合わずに遷化された。御年六十四歳であった。

(浄土宗総合研究所客員教授)

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

念仏讀本

執筆者一覽

石眞大佐中樞
井野野藤村尾
教正法賢辨辨
道順道順康匡

稲小佐江島笹
垣西藤藤野本
眞存春澄禎戒
我祐夫英祥淨

中松梅矢井
野浦原吹川
善眞慶定
英一隆輝慶

(日次登場順)

念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■
法然上人讀仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
電話：03-3578-6847/FAX：03-3578-7036

平成十二年

暑中御見舞申上げます

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村 康隆

大本山 増上寺
法主

藤堂 恭俊

大本山 金戒光明寺
法主

坪井 俊映

大本山 百萬遍知恩寺
法主

大野 忍敬

大本山 清浄華院
法主

大田 秀三

大本山 善導寺
法主

民谷 隆誠

大本山 光明寺
法主

戸松 啓真

大本山 善光寺大本願
法主

鷹司 誓玉

平成十二年

暑中御見舞申上げます

浄土宗務総長

水谷 幸正

浄土宗議会議長

江口 定信

浦安市堀江四—十四—二

浄土宗東京事務所長

袖山 榮眞

〒380-086 長野市西後町一五六八 十念寺

浄土宗出版室長

小林 正道

〒100-0001 東京都港区芝公園四—九—八 妙定院

浄土宗東京教区教区長
光取寺住職

大室 了皓

〒140-0001 品川区上大崎一—五—十
電話〇三—三四四—八三八四

浄土宗神奈川教区教区長

清水 嚴炬

〒250-0001 鎌倉市材木座六—十七—十九
大本山 光明寺中
電話〇四六七—(二二)二四七六

平成大事業勸募懇請中
御影堂屋根替大修理完成
ひきつづき阿弥陀堂新築再建

美作
誕生寺

〒200-0001 岡山県久米郡海町里方八〇八
TEL 〇八六七—(二八)二二〇二
FAX 〇八六七—(二八)二二六二

平成十二年

暑中御見舞申上げます

総本山知恩院
おてつき運動 推進部長

東海林良雲

塩釜市雲上寺

淑徳学園中学校・高等学校
校長

大谷 壽雄

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳大学 淑徳短期大学
理事長

長谷川良昭

〒174-066 東京都板橋区前野町五-五-二

伊勢教区

山下 法文

松阪市樹敬寺

宗議会議員

小田 義海

九品院住職 佐世保南無の会
〒870-0000 佐世保市大和町一八八-一
TEL 〇九五六(三三) 七六七六

貞松院住職

山田 和雄

〒820-0000 諏訪市諏訪一十六-二十一
電話 〇二六六・五一・一九七〇

正覚寺

住職 江藤英賢

〒915-0000 武生市京町二-一-一八
TEL 〇七七八(三三) 一三一九
FAX 〇七七八(三三) 六二二七

平成十二年

暑中御見舞申上げます

青森教区
青岩寺

青山 淨晃

宗議会議員

河本 眞龍

〒524・004 萩市枳屋町四二
電話〇八三八・二二・一五八七

勝願寺

〒565・002 埼玉県鴻巣市本町八一・二二・二二

和歌山・西念寺

武田 脩彦

〒642・004 海間市阪井四六六

宗源寺

斉藤 价洲

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山 實相寺

愚鈍院
住職 こつぶがや文庫主

中村 眞道

〒820・001 仙台市若林区新寺三十一・一十七
電話〇二二・二二五六・六〇五七

平成十二年

暑中御見舞申上げます

晴雲寺住職

塚田弘導

〒550-0808 平塚市立野町六十五
電話〇四六三(三三)二六三八

弘経寺住職

金田進徳

〒300-0808 茨城県取手市白山
二一九一二八

〒430-0808 静岡市鷹司二丁目四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四・三五二・三六七三
FAX〇五四・二五二・三六五六

骨仏の寺

一心寺

〒590-0808 大阪市天王寺区達磨二・八・六十九
電話〇六(六七七)〇四四四

定義如来

西方寺

〒280-0808 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇一一(三三九)三〇一一

浄土寺

阿川文正

〒130-0808 東京都港区赤坂四一三十五
電話〇三(三三八)三六三〇

孤峰山 蓮馨寺
諸願

成就 吞龍上人奉祀

久米原恒久

〒570-0808 川越市連雀町七・一
電話〇四九二(二二)〇四三三
FAX〇四九二(二六)〇六七六

平成十二年

暑中御見舞申上げます

〒112-0002 東京都文京区小石川三丁目
十四番六号

無量山
傳通院

TEL 03 (3381) 4137・03 (代表)

函館
称名寺

〒040-0055 函館市船味町十八-十四
電話 011-381 (111) 0574

浄土宗大願寺住職
浄土宗宗議会議員

神谷英敏

〒042-0822 函館市銭亀町一〇一

大吉寺住職

成田有恒

〒154-0001 世田谷区世田谷四-七-九

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区青山
2-26-38

電話 03 (3404) 8447

ホームページ

<http://www.baisouin.or.jp>

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0001 品川区南品川二-一-十二

天光院

真野龍海

<http://www.evam.ne.jp/tenkoin>
ryumeno@yenus.dti.ne.jp

暑中御見舞申上げます

光田寺住職

佐藤良純

〒100-0002 文京区小石川四―二二―八

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

明福寺

福井豊信

〒100-0002 江戸川区江戸川三―八一―一

宗議会議員
宗政府代表幹事

熊谷靖彦

佐賀教区本應寺

横浜 大光院

宮林昭彦

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

〒220-0002 鎌倉市長谷四―一二―八
電話 (〇四六七) 二二・〇七〇三
FAX (〇四六七) 二二・五〇五一

佐藤密雄上人は、去る六月十五日
世寿九十八歳で遷化されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

小澤勇貫・著 『ご法語に学ぶ』

東京・八王子極楽寺の先代住職小澤勇貫上人の『浄土』連載原稿が本になりました。

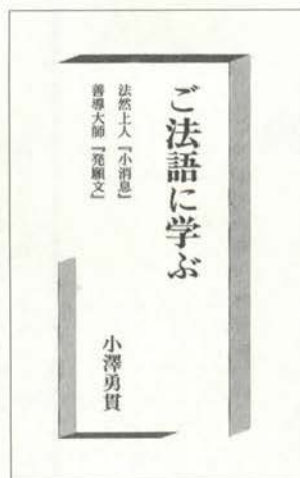
小澤憲珠現住職が先代七回忌にあたり、記念本として出されたもので、昭和四十年代に『浄土』に連載された勇貫上人執筆の法然上人『小消息』と善導大師『発願文』をまとめた『ご法語に学ぶ』です。当会ではこうしたバックナンバー原稿の出版のお手伝いもしております。お気軽にご連絡下さい。

・なお、『ご法語に学ぶ』は非売品ですが、小澤先生のご好意によりお分けします。ご希望の方は編集部までご連絡下さい。

法然上人鑽仰会『浄土』編集部

☎ 03-3578-6947

FAX 03-3578-7036



浄土宗と浄土真宗の違い

七月、八月を迎えると私たちは浄土宗では、誰もが「お盆の季節で忙しくなりますねえ」という会話を始めます。そして同時に施餓鬼会を行うお寺も多いことでしょう。まさに一年でもっとも忙しい季節です。

しかし、浄土真宗のお寺ではこれらの行事がありません。お盆に棚経で檀家参りをするのも、施餓鬼大法要を行うこともないのです。

元来浄土真宗の考え方の中には、ご先祖への追善回向という

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)384211289

振替001802145231

考え方はありません。生きてい

るものの方から、亡き人に対して功德を振り向けようとするこ
とは、自力のはからいであると
理解しているようです。我々が
亡き人に何かしてあげようなど
と考えることはおこがましいこ
とで、私たちができることは、
亡き人がお浄土から阿弥陀仏の
はからいで、私たちに對して真
実への目覚めを促して下さって
いることに、感謝することだけ
だと説いているようです。

ですからお盆にご先祖が帰っ

その4

お盆と施餓鬼

てくるなどという考え方もな
れば、供養されていない霊を供
養してあげようなどという考え
方もしないのだそうです。

供養されていない霊があると
すれば、阿弥陀仏の力を疑っ
ことになるのでしょうか。

浄土宗ではそうは考えません。
お盆の期間、より身近にご先祖
を感じることによって深く先祖
の絆を理解し、施餓鬼会によっ
て人としての優しさ、思いやり
の心を育てることが信仰の証と
考えるからです。(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●祭

〔特選〕

出してみる嫁せし娘の祭り下駄

増田 信子

・祭りが近づいた。今年是用があつて、娘は帰つて来られないようだ。あれやこれや準備をしながら、娘の下駄も出してみる。とまあこういうところだろう。親にとつて娘は、いつまでたつても子供なのである。

〔佳作〕

父祖よりの笛みがきおり祭り前

中島富士子

文身のてらてら光り祭り笛

大熊 富男

提灯の町名太き祭りかな

谷 しげ子

●心天

〔特選〕

心天強酢に噎せて老い二人

佐藤 雅子

・「強酢」は「こわす」と読ませるのだらう。老いは夫人か友人か。話しながら食べてついむせてしまったのを、酢のせいにしてい

選者=増田河郎子

るのかも知れない。むせながら、話はいつまでも尽きないのだろう。

〈佳作〉 山寺に入るる一息心天

細田 初枝

軒低き和菓子屋の路地ところてん

四本 章江

香りよし海女がつくりし心天

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

妻よりも先に見つけし初つばめ

野村 昭輝

・もう燕が来る頃だという話が、二人の間にあったのだろう。夫のほうが先に見つけて、それを妻に告げるのだ。自分が先に見つけたという得意げなところが面白い。春を迎えた喜びが句の裏に見える。

〈佳作〉 檀林の丘に中学風光る

長尾 子浪

包丁のきらめく濡れ刃青葉寒

池田 息吹

草の葉に透けて憩えり糸蜻蛉

小林 恵美

祭

朝餉食ぶひびく太鼓や夏祭り
 鉦の町夕暮れ近し下駄の音
 祭笛斜めに構え美少年
 スーパーに来て花魁の祭見し
 深川に生まれ根っから祭好き
 時代物の人形カククリ祭り山車
 夜に入りて風向き変はる祭笛
 法鼓打つ祭太鼓の手捌きで
 祭だけねじり鉢巻紳士との
 外人も御輿を担ぎ夏まつり
 老人は椅子に坐れり夏祭り
 木遣唄村は総出の夏祭り
 木遣りする子の息はずむ祭かな

嶋田喜代子
 吉里ひとみ
 河合富美枝
 佐藤雅子
 細田初枝
 金谷友江
 片桐てい女
 横井龍行
 中島一子
 上野明達
 本橋久栄
 浜口佳春
 井村善也

心太（ところてん）

登山茶屋昔も今も心太
 次々と味覚々えはる心太
 溪流を眺めし涼味心太
 老銭銅貨使ひし記憶ところてん
 潮の香や母よろこばすところてん
 大仏の真向ひに座し心太
 心太茶屋の床几のお堀端
 心太潮風つかむ竹の箸
 心太酔にむせびおり蕨薺ゆるむ
 心天作りくれたる母在らず
 波型に盛られ涼生む心太
 裏口に女声して心太

自由題

万緑や一期一会の遍路宿
 連休の苞にと煮込む庭の路
 老鴛や山の風入る休息所
 白川郷親子燕の合掌家
 産声の銚がかへる卯浪かな
 卯浪立つ一瞬釣人見失ひ
 母の日に娘より届けり濃紫陽花
 夏立つや江戸組紐の紅鬱金
 中陰を拾ひて行ける喪服かな
 夏めきて大工の昼寝板の上
 庭石が青菜の色をもらい染む
 沖からの風を吞み込む鯉のぼり

中島一子
 上野明達
 横井龍行
 片桐てい女
 嶋田喜代子
 河合富美枝
 金谷友江
 井村善也
 山口信子
 増田信子
 石原新
 谷しげ子

浄土誌上句会のお知らせ

季題

晩夏光

桃

自由題

締切・八月二十日

発表・『浄土』十月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

細田初枝
 金谷友江
 嶋田喜代子
 吉里ひとみ
 河合富美枝
 佐藤雅子
 上野明達
 片桐てい女
 中島富士子
 坂倉左武朗
 小久保すすな
 小久保あきさ

マンガで楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

往生

「おうじょう」と聞けば困ったとか、どうにもしようがない、といった意味に使われる。ムサシの小舟のパンクは、まさに往生そのもの。

ですが、もともとは「往生まれる」ということで、浄土教では西方極楽浄土へ生まれることを言います。

つまり往生は、もともとは困ったという意味では使っていませんでした。

ムサシの供養でササキも極楽に往生したことでしょ。



編集後記

供養菩薩さみしく微笑む月見草 岱潤

雨の中「平等院展」を見に行った。
庄卷は実物大の阿弥陀如来。本尊のお
写真を部屋の一歩奥まった正面にお祀
りして、その前、回りをまるで戦国武
將の陣営のように取り囲んで展示され
た五十二軀の雲中供養菩薩像である。

本来鳳凰堂の壁の高いところにお祀
りされている雲中供養菩薩を、我々の
目の高さまで降ろしまじかに菩薩と向
き合うことができるこの度の企画は、
今回の展示のメインであろう。

約半数の菩薩が、雅楽の楽器を演奏
しているように躍動的に作られ、薄暗
く淡い照明に照らされた菩薩から、そ
の音色が静かに聞こえてきそうな感覚
にさえなる。土曜であったせいか若い

人の姿が多く、熱心に菩薩たちに見入
るその姿に私の心が嬉しくなった。

平等院住職は著書の中で、この菩薩
たちは仏に対する供養と、堂内にいる
ものに対する供養という二重性、そし
て行者を護念、讃嘆するものであり、
さらに仏とともに来迎し、お迎えの菩
薩であると書いている。

だからこそ楽器を演奏しながらも、
どこかもの悲しい表情であることがう
なずけるような気がした。世の中を変
えるのは、強く激しい言葉や態度では
なく、優しくたおやかな言葉であり行
動なのだと感じ、その雲中供養菩薩に
月見草を連想した。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

編集顧問

大室了皓

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

佐山哲郎

岡川彰道

浄土

六十六巻七・八月号 頒価六百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十二年六月二十日

発行 平成十二年七月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三三七八 六九四七

FAX〇三三三七八 七〇三六

振替〇一八〇八八二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害ならせ



落石注意



足元注意



低空飛行



非常口



落石注意



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



ガラス厳禁



安全マーク



児童注意



落石注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？ 暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111 (大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人顕仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
- 水晶数珠
プレスレッド ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

平成11年6月より頒布価格が変わりました

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

